中国海洋大学 2021 年硕士研究生招生考试试题

科目代码：883　　科目名称：综合日语

日本語学の部

一、次の質問に答えなさい。(12 点)

語彙は、使用者、場面、時間・空間などの要素によって、異なる形が生まれてくるものです。ある具体的なものを指すのに、話し手が自分自身の年齢や、性別、身分職業などに合わせて異なる語を選んで使い分けることがよく見られる。日本語では、これを「a」という。そこには、いろいろな種類があって、学習者にとって、それを身につけるのに難しいところがある。その内、性別によるものが多いのは目立つ特徴として指摘できる。

問１、「a」に入れる用語を次から選びなさい。(2 点) ①位相　②文体　③媒体

問２、日本語では性別による語の使い分けが目立つ傾向として指摘されているが、具体的にどのようなものがあるか。例を挙げながら説明しなさい。たとえば：感嘆詞では、男女の間に違いがある。「あら、」(10 点)

二、次のことばは、改まった・くだけた・文学という場面などに合わせて並びなさい。(10 点)

本日　でかい　やつ　黄昏　鬱蒼とした

蒼穹の昴　遠路はるばる　誠に　感謝する　頭（こうべ）

三、次の文を読んで質問に答えなさい。(20 点)

日本語には、擬音語・擬態語（音象徴語）が多くあって、日本語の特徴の一つとして指摘されている。そこには、はっきりした体系性が見られる。具体的に言えば、「～ン」「～っ」「～リ」「反復形」などのパターンがあるといわれる。そして、語の形に合わせて微妙にその意味が違ってくると見ることができる。

問１、「ぺろ」を基に文中に示された四つのパターンに従って「音象徴語」を造りなさい。(8 点)

問２、それぞれのパターンの語は、意味の上で微妙に異なるが、「持続性」「瞬間性」「一回性」「反復性」などをそれぞれ表す。どのパターンは、どの意味を表すかを判断して記しなさい。

（4 点）例：「～」は突発性、瞬間性を表す。

問３、それぞれの語を使って日本語の文を作ってみて中国語に訳してみなさい。(8 点)

四、次の文の内、下線の単語で派生義（本義から生まれてきた意味）で使われるものを選びなさい。そしてその派生義を記述せよ。(8 点)

例:　食パンの耳は厚い。「耳」は、食パンの狐色に焼いた外側の部分を表す。

（1）足を伸ばして座る。

（2）炬燵の足が折れた。

（3）猫の手を借りたい。

（4）飼っている猫が子猫を生んだ。

特别提醒：答案必须写在答题纸上，若写在试卷或草稿纸上无效。

（5）ピカソは多くの絵画の名作を生んだ。

（6）彼を学長のポストから下ろす。

五、次の文の下線の動詞の現在形は、それぞれどのような文法的役割を表すか。（10 点）

例：「ある」は「現在」や「未来」を表す。その他に、繰り返すを表すものもあるなど。

（1）花子は寮にいる。

（2）水は 100℃で沸く。

（3）食事の後に、いつも散歩する。

（4）遠くに富士山が見える。

（5）これはうれしいと思う。

六、次の質問に答えなさい。（15 点）

日本語と中国語は、ほかの言語間と比べてみた場合、歴史的に言葉の相互借用が盛んに行われてきた。古代では、中国語から日本語へ、そして近代になって、日本語から中国語へと、言葉が取り入れられてきたのである。その結果の一つとして、いわゆる「中日同形語」というものが多量に生まれたと指摘することができる。例えば、「重大」のような言葉である。その多くは、形が同じであるが、意味や用法などの面には微妙な違いがあるもので、いわゆる「同形類義語」のような存在である。これによって、学習者に便利な一面をもたらされた一方、不便さもあって、習得にマイナスの影響を与えている場合が多いといえる。それは、特に作文を書いたり話したりするときに無意識のうちに表れるのです。

問：日本語で次の言葉を使って 200 字前後の文章を作ってみなさい。

「厳重」「深刻」「重大」「有力」「険悪」

文学の部

七、次の言葉に読み方をつけなさい。（1×10＝10 点）

泉鏡花　清少納言　舞姫　永井荷風　小林多喜二

井伏鱒二　島崎藤村　幸田露伴　春琴抄　羅生門

八、次の内容について、正しいと思うものに“○”を、正しくないと思うものに“×”をつけなさい。（1×10＝10 点）

1、女性に仮託してひらがなで書かれた最初の日記は『紫式部日記』である。

2、随筆文学最大の傑作は『枕草子』である。

3、『古今和歌集』は日本最初の勅撰和歌集である。

4、『懐風藻』は現存する日本最古の和歌集である。

5、平安時代の文学は貴族文学とも言われている。

6、最初の勅撰漢詩集は『凌雲集』である。

7、島崎藤村の詩は雑誌「文学界」の第一期を代表している。

8、明治時代、作者自身の日常生活体験を文学的に追究する私小説が盛んになった。

9、明治初期、西洋の文学を習う目的で翻訳文学が流行した。

10、大正末期から昭和初期にかけ、プロレタリア文学が生まれた。

特别提醒：答案必须写在答题纸上，若写在试卷或草稿纸上无效。

九、次の日本文学事項を簡単に説明しなさい。(4×5＝20 点)

1、紅露時代　2、永井荷風　3、新感覚派　4、芥川龍之介　5、『万葉集』

十、次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20 点)

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七条のプラットフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱっと吐いて、暗い国へ轟と去った。

たださえ京は淋しい所である。原に真葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔のままの原と川と山である。昔のままの原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至っても十条に至っても、皆昔のままである。数えて百条に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しかろう。この淋しい京を、春寒の宵に、とく走る汽車から会釈なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ――町が尽きて、家が尽きて、灯が尽きる北の果てまで通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云う。「遠いぜ」と居士が前から云う。余は中の車に乗って顫えている。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思わなかった。昨日までは擦れ合う身体から火花が出て、むくむくと血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮浸み出はせぬかと感じた。東京はさほどに烈しい所である。この刺激の強い都を去って、突然と太古の京へ飛び下りた余は、あたかも三伏の日に照りつけられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだようなものだ。余はしゅっと云う音と共に、倏忽とわれを去る熱気が、静なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

(夏目漱石「京に着ける夕」より)

問１、次の言葉に読み方を付けなさい。踵　依然　無理　刺激　震動（5 点）

問２、文中に「余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱっと吐いて、暗い国へ轟と去った。」とあるが、この中に、「黒きもの」は何を指すか。この一句は、実際にどんな状況を表現しているか。(5 点)

問３、京都について、「余」はどうして寂しいと感じるか。文中の内容に基づいて説明しなさい。(5 点)

問４、「余」にとって、東京はどんな所か。文中の内容に基づいて説明しなさい。(5 点)

十一、次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(15 点)

京都に足かけ十年住んだのち、また東京へ引っ越して来たのは、六月の末、樹の葉が盛んに茂っている時であったが、その東京の樹の葉の緑が実にきたなく感じられて、やり切れない気持ちがした。本郷の大学前の通りなどは、たとい片側だけであるにもしろ、大学の垣根内に大きい高い楠の樹が立ち並んでいて、なかなか立派な光景だといってよいのであるが、しかしそれさえも、緑の色調が陰欝で、あまりいい感じがしなかった。大学の池のまわりを歩きながら、自分の目が年のせいで何か生理的な変化を受けたのではないかと、まじめに心配したほどであった。

京都から時々上京して来たときにも、この緑の色調の相違を感じなかったわけではない。しかし三日とか五日とかの短い期間だと、それはあまり気にならず、いわんや苦痛とまではならなかった。それが、引っ越して来て居ついたとなると、毎日少しずつ積もって行って、だんだん強くなったものと見える。いわゆる acceleration の現象はこういうところにもあるのである。とうとうそれはやりきれないような

气持ちにまで昂じて行った。自分ながら案外なことであった。京都に移り住む前には二十年ぐらいも東京で暮らしていたのであるが、かつてそういう気持ちになったことはない。

（和辻哲郎「京の四季」より）

問１、文中に「大学の池のまわりを歩きながら、自分の目が年のせいで何か生理的な変化を受けたのではないかと、まじめに心配したほどであった。」とあるが、作者は何を表現したいか。文中の内容に基づいて説明しなさい。(5 点)

問２、文中に「自分ながら案外なことであった。」とあるが、案外なことは何を指すか。(5 点)

問３、作者はこの二つの段落の内容を通して、何を表したいか。そして、どのような表現方法を使って表現したのか。(5 点)

特別提醒：答案必须写在答题纸上，若写在试卷或草稿纸上无效。